

米原湊 朝妻湊 米原町米原 米原町朝妻筑摩

◆米原湊

米原湊は、慶長八年（一六〇三）北村源十郎が彦根藩の保護を受けて開いた湊です。湊は当時、内湖の奥に位置する湊で、彦根藩の三湊（長浜、松原、米原）の一つとして重要視されていました。更に、中山道の番場宿と湊を結ぶ深坂道が切り拓かれ、中山道の貨客を琵琶湖の水運に乗せたことで隆盛を極めたことから、朝妻湊や長浜湊と、湖上運送を巡って激しい争奪を引き起こすこととなります。つまり、米原湊の開湊により、中世以来の要湊の朝妻湊の貨物が激減。朝妻湊は醒井宿から貨物を廻そうとしましたが失敗し、米原湊は発展します。一方、長浜湊とは、上方方面の荷物は米原湊へ、北陸方面は長浜湊へ出すことで決着しました。

北国脇往還 藤川宿 伊吹町藤川

◆藤川宿の概要

北国脇往還は、中山道関ヶ原から伊吹山・小谷山の麓を通り木之本宿へと通じる街道です。東海地方と北陸地方を最短で結ぶ道として、古くより様々な歴史の表舞台に登場してきました。北国脇往還と呼ばれるようになったのは、明治時代に入ってからと考えられ、江戸時代では「越前道・北国道・江戸道」などと呼ばれていました。藤川宿は近江に入って最初の宿場町です。古くから軍事的に重要視されていたところです。往時は、東に隣接する玉宿が上り（木之本方面）の荷物を、藤川宿が下り（関が原方面）の荷物を扱うという、二宿で一宿場の役割を果たしていました。

「江州藤川宿町絵図」には、往還に沿って南北両側に約三十軒が軒を並べ、東端から二軒目に「御高札場」が見えます。天保十四年（一八四三）の資料



米原湊地籍図

◆朝妻湊

朝妻湊は、天野川の河口に築かれた湊です。近隣の筑摩湖岸には朝廷などへの貢納物を送るため、調理・加工場を有した集荷場である筑摩御厨があったとされ、古代からの要湊でした。特に、湖上交通の発展が著しい室町中期以降は、朝妻く坂本間の船便の利用が増加したようです。琵琶湖を通過する京都向けの荷物は、租税や年貢が中心で、北陸だけでなく東国のももありました。また、年貢だけでなく京都の寺院建築用の材木も、この湊から大津などへ運ばれました。

戦国期には、城が築かれ、浅井・六

には、家数一二五軒、人口六百人（男子二九四人、女子三〇六人）、常備人馬十人十疋などあり、当時の宿場の様子が見て取れます。また、本陣は問屋と兼ねていた林家をはじめ、脇本陣（林家）、江戸屋・若狭屋・近江屋・大黒屋などの旅籠屋が軒を並べていたようです。



藤川宿のまちなみ

◆藤原定家寓居跡・墓地

集落中ほどの十字路付近に、大きな石垣とその内側に庭園状の遺構が残っており、藤原定家の屋敷跡と伝えられています。藤原定家は鎌倉時代の歌人で、一時勘当されてこの藤川の地に数年間隠遁していたと伝えられています。また、定家が藤川の春夏秋冬などを詠



藤川宿散策マップ



藤原定家墓地

んだ「藤川百首」も残されています。



朝妻湊現況



角両氏による争奪戦が繰り広げられました。朝妻城主の新庄氏は、姉川合戦以前から織田方に属していましたが、天正十一年（一五八三）摂津山崎に移封されて、城は廃城となったようです。古くから要湊として賑わいを見せた朝妻湊も、慶長八年（一六〇三）に彦根藩の保護の下米原湊が開かれたことから、次第に衰微していきました。